### ま<u>ず</u>1





そろもあざやかしょくくもあざやかける

### あを

## 集

だう

佐 藤 竹 僊

金 魚 田 に 足 を 踏 み 入 れ た る Z こち

起 き 7 ま づ  $\Box$ に 飴 入 れ 開 戰 日

う つ < し 冬 韋 7 正 坐 7

さ ざ hか B 小 な 店 に 灯 0) 色 が

冬

0)

町

身

を

 $\mathcal{O}$ 

り

だ

L

7

Ш

覗

<



月 ま だ 見 め ŧ 0) に 冬 0) 水

あ た た か 灯 0) ま た た け ば そ れ だ け で

買 う 7 き 蓮 根 に 芽 あ り だ う B

本 O冬 木 そ び 5 に 人 か な

初

夢

に

出

7

き

7

欲

き

水

見

る

 $\nabla$ 

と

冬 O雨 歸 宅 う な が す わ 5 ~ 唄

裏 庭 に 出 7 霜 柱 み 7 も ど

ま た 同 じ 焚 火 O底 0) 地 ベ た か

な



#### か け 5

#### 篠 田 大 佳

事 故 あ り 7 花 壇 0) か け ら 輝 け る

雑 踏 O息 と あ L お と 冬 め け り

冬 あ か ね 築 地 市 場 O瓦 礫 消 え

Z 烈 消 え 7 土 な き 街 0) 暮 易

教 そ ぞ ろ 集 放 課 後 0) 暮 易

ま

り

科

書

0)

銀

座

に

註

O

つ

<

秋

ぞ

文 化 祭 鼓 笛 0) Z ゑ 0) 焦 り か な

#### 神 無 月

須 賀 敏 子

栃 木 路 B 渡 良 瀬  $\prod$ 0) 枯 尾 花 時

々

は

ナ

ビ

を

無

視

7

冬

0)

旅

神 無 月 年 振 り O老 姉 妹

手 袋 を 枚 重 ね 7 柚 子 を 摘 む

穾 出 来 上 が る 苦 味 少 々 柚 子 0) ジ ヤ  $\mathcal{L}$ 

然

に

綿

虫

Z

は

り

ベ

ラ

ン

ダ

に

寒 鴉 そ O黒 色  $\mathcal{O}$ 輝 き 7

青

空

B

黄

色

深

め

7

実

千

両





枯 枝 を 切 り と り 鴉 鳴きて 過ぐ

縁 側 を 羨 む 人 と 冬 陽 浴

冬 O陽 0) め < ŧ り 両 手 に 7 受 け

酔 芙 蓉 花 終 り た る 庭 を 掃

心 0) み 急 き冬 支 度 と と Oは ず





長 崎 桂 子

大

学

駅

伝

あ れ Z れ と 思 考 0) 今 日 B 日 短 に

爽 B か B 少 々 五. 体 か た < な り

鮮 明 B 秋 0) 薔 薇 京 香 に 噎 る

町 筋 O紅 葉 L 主 婦 0) 立 話

伊 勢 0) 冬 大 学 駅 伝 途 な 顔

冬 に 入 る 手 足 O痛 み 治 療 院

沿

道

0)

マ

ス

ク

O

拍

手

大

学

駅

伝

痛 む 足 床 に 横 た  $\sim$ 小 六 月



半袖も長袖もをり小春の日

席一人分の権利とホットティ

静けさに読書邪魔され小六月

片言の職人さんの冬日焼

 $\mathcal{C}$ 

h

B

り

と

触

る

る

Щ

茶

花

か

<

れ

 $\lambda$ 

ぼ

ボ ジ  $\exists$ ヌ ボ 爪 O先 ほ 蝕 0) 月

ゴッホ展

赤座典子

描 シ  $\exists$ 人 伝 ン に Z る 銀 O人 ょ  $\nabla$ 冬 と す Oぢ 虹

小

春

風

冬晴や口上長き大道芸

冬ひばり寂聴さんは他界へと

茶

0)

花

B

健

診

つ

つ

が

な

<

終

る

柘榴落葉日毎に庭の光増す

二年ぶりランチに河豚の土瓶蒸し

元気でゐてまた会はうねと花八

手



泉

冬 空 B ス 力 1 ツ IJ が つ き ぬ け 7

参 道 を か 5 か 5 と 舞 Z 落 葉 か な

親 子 鹿 落 葉 蹴 散 5 森 O奥 落

葉

掻

子

が

ず

る

ず

る

と

熊

手

か

な

蓑 虫 を つ か も う と す る 赤 h坊

陽 水 を A Ιジ 0 が 力 バ 冬 0)

月

+

畳

0)

炬

燵

開

B

中

華

ま

h

冬

紅 葉 走 り め け た る  $\equiv$ 冠 馬

江

雑 詠

大 日 向 幸



2

O

朝

に

初

冠

雪

0)

富

士

を

見

夜

0)

ナ

1

ス

煌

め

<

町

を

見

せ

7

<

れ

冬

0)

町

見

え

る

Z

 $\mathcal{O}$ 

部

屋

家

具

は

な

ナ

ス

ょ

り

夜

0)

深

さ

を

伝

 $\sim$ 

5

れ

夕

食

は

白

W

お

粥

B

月

0)

影

帰

宅

せ

る

夢

を

見

た

日

 $\mathcal{O}$ 

初

涙

早

朝

O

窓

に

寒

露

 $\mathcal{O}$ 

び

つ

り

ح

生

活

音

満

5

た

Z

O

部

屋

冬

桜



13

12

### 七郎衛門吉保

入寂の女傑の残す藪柑子

返り花咲けと願ふも友逝けり

六歳の洋舞の色や室の花

今宵また殿様になる干蒲団

小夜時雨深夜電車のレール音

ア

メ

IJ

力

ŧ

日

本

ŧ

小

春

M

V

P

初雪や息を南に吹きかけり

片肌を見せ大根の白きかな

インバネス

篠田純子

鴨鵜鴨鵜鴨鷺

濠

賑

B

か

鴨

イ

ン

バ

ネ

ス

 $\mathcal{C}$ 

と

り

\_"

と

0)

人

と

0)

距

離

を

小六

月

ア

ン

ダ

パ

ス

に

出

水

O

筋

B

残

る

蟲

秋

0)

苑

地

を

行

鷺

と

す

れ

違

ふ

13





花 検 モ 椎 金 島 < か 雨 5 草 5 0) OO $\mathcal{O}$ す群れ 道 びる 名を思 に 實 Oか に  $\sigma$ 座 未 有 に 甘 な 紅葉か 田 賑 ら男女が さ に て 重 ひ を やかな帰路 草 粒ふ 出 当 語 Z  $\prod$ つ た と せずに秋 7 散 に る た き な れ 7 り 兄 の 栗 7 き が 芸 を 花 秋 か る 夕 0) 足 な な る 焼 道 雨 篠田 佐藤 七郎衛門吉保 大日向幸江 秋 赤座 長崎 田中 須賀 篠  $\mathbb{H}$ Ш なほ子 純子 藤穂 敏子 大佳 桂子 典子 泉

喜孝抄

ブ

力

カン

昭

和

謡

O

七郎

衛門吉保

水

に

母

が

面

影

活

け

7

を

た

5

は

ず

答

る

秋

澤佳子

駅

IJ

尾長

O

群に光

矢

大日向幸江

黒

断

崖

壁

薄

紅

葉

赤

座

子

呼

び

7

親

幕

野

葡

萄

O

昔

O

恋

O

B

う

色

な

ほ

子

学

帰

路

O

挨

拶

昼

5

5

ろ

長

桂

子

お

互

に

O

秋

夜

 $\mathbb{H}$ 

穂

吾

宿

猫

ŧ

犬

う

5

子

劇

叫

声

熟

た

ま

O

 $\mathbb{H}$ 

大

蒼

天

を

分

け

7

大

瀬

戸





# 父のカネ母のクヂラと釣忍

佐藤竹僊

ヤスヤ寝ておりました。 たのには愕きました。当時主人と早稲田で商売をしていましたので、 ル法にしなければと、 い将棋盤を作る時も、 我が生家にも、 曲尺と鯨尺がありました。何尺、 活躍していました。私に娘が産まれた時、父は廃材で、 両親は努力していましたが。 (純子) 何寸、 特に父の曲尺は常に手元近くにあり、廃材を使 何分と大人達は使っていました。メート ベットは店に置いて、 ベビーベットを拵え 娘はス

# トり立てばアンナプルナの峠茶屋

佐藤竹傅

界第十位の高さを誇る高山です。 ら、死亡率も高いそうです。 アンナプルナはネパールのヒマラヤ山脈に属する山系の総称で主峰は標高八○九一メートルと世 で人の気配を感じ取れることの安堵は大きいでしょう。 そんな難登山から帰還することは興奮状態であるわけで、バッティ(茶 エベレストと違い、 敢えて危険を冒す登山スタイルが多いことか 下山者の饒舌を想像します。 (大佳)

18

# ※部の秋一皿にありダムカレー

七郎衛門吉保

湖。 テレビでよく紹介されているダムカレーです。アーチ型に盛られたご飯はダムで、 秋バージョンでしたら、 紅葉の葉が飾られているのでしょうか。 楽しそうです。 (純子) カレーはダム

霧の水上バス「ラ♭」の汽笛

篠田純子

起させます。 音、「ラフラット」の とにかく事実を描写しようとする作者です。「霧」 (大佳) 「ら」音の繰り返しが耳を楽しませます。 と「汽笛」 「ラフラット」 0) 「き」音と 「水上バス」 の音が豊穣な秋を想

# 九年母たわわ象住みし跡平ら

篠田純子

と付けてあると……九年母が出てきて救はれる。 たりブランコがあったり賑やかだが象舎は何もない。ただ平らなのである。ここで「秋の暮」など とはない、 た時はさう思はなかったが、住む主がゐなくなった象舎の庭は広く感じられる。猿の住家は山があっ 動物園の中に住んでゐた象のことだらう。「住みし」といふいひ方がをかしい。象が生活してゐ とおもふ。 (喜孝) 九年母は温かい地の柑橘類とか。 まだ食したこ

# 終演のやさしい耳鳴り夜の秋

篠田大佳

如何でしょうか。 の涼しさに、心はまだ音曲の余韻にシャウトしています。 演奏会かライブでしょうか。 (純子) 終演後の耳に、 まだ大音量の余韻が残っています。 「耳鳴りやさし」として中七にするのは ほっとする野外

# **喎語して稚児は花火に魅せらるる**

篠田大佳

ので詠まれてみては。(喜孝) らしい能力です。 を自分が作った音で驚き、喜びを表している。立派な言葉です。はじめにコトバありきです。 の使い方や発声される音を学習している。」となる。 喃語は、 ウィキペディアによれば【乳児が発する意味のない声。 控えて置かれるとおもしろいですよ。 つまらない。 喃語などと云はないでコトバ 意味があるのです。 言語を獲得する前段階で、 音 自分の感情 そのも 素晴 声帯

# 約束の様に我家の彼岸花

須賀敏子

と親しくお付き合いしていて、読者まであたたかな気持ちにさせてくれます。 れている相手は、 「季語は約束」 とは、 自然ということになります。 俳句入門書によく書かれている文言ですが、 自然から彼岸花が贈られているという感覚が、 掲句で作者が贈り物を約束さ (大佳)

20

## 1.念めき一本咲きし曼殊沙華

田中藤穂

者の晴やかなひとときを大事にしたい句です。 晴々しい気分を覚えた一瞬を俳句に記録しています。不吉を予期させる曼珠沙華の俗信よりも、 光景としては、 青々とした植栽に、一本だけ咲いた曼珠沙華を想起します。 (大佳) 何かの記念のような

## ・ーマルリサイクルの討論花木槿

長崎桂子

なのか。 想像します。(大佳) というテーマを想定して、 ル」という概念においては、日本独自のものだそうです。 「サーマルリサイクルはリサイクルなのか\_ サーマルリサイクルとは、 「花木槿」の季語を参照すると、 討論は作者の身辺で行ったのか、 廃棄物を焼却するときに発生する熱を再利用したもので、「リサイク 栄華を導くとあります。掲句は人類に向けて詠まれたと テレビなどのメディアで行われたもの

# 《国語の不思議な文字や小鳥来る

林なほ子

らずには不思議な言語ですが、隣の席にはその不思議な言語を使いこなす人がいるのです。 小鳥の囀りとよく通じます。 学生時代、 アルバイトで色々な国の外字新聞を整理していた時期がありました。 言葉は意味よりも、 感情のものなのかもしれません。 外国語は心得知 (大佳)

# 室堂の万年雪の切れ深い

赤座典子

えぬレンズ雲」など山岳地ならではの句は、 作者が、 バスを覗き込んでいる様子が見えます。 いずれも魅力的です。 「切れ深し」が、 (純子) 恐ろしそうです。「半日消

# 猫を抱き茸に埋もれる少女かな

秋川 泉

できないのだと、 す。そこで憂鬱な少女がベッドで手遊びをしている様子が見えて、 題より、 何かの物語のワンカットではないかと思いましたが、 茸がまるでベッドのようで、 不思議な感想を覚えました。(大佳) 大木の中に家族が暮らしている童話のような世界が浮かびま 確信が持てませんでした。フィンランドの 場面は創作できても憂鬱は創作





### 佐藤喜孝

#### 須賀敏子

Ш 咳 龍 込 縁 の め 玉 を ば ゅ 背 つ 寸 中 < 転 ひ り h り 歩 だ り だ む と痛み け 小 な 春 か の な に IJ

めた句姿、 飛んで行け!」で済むが敏子さんは身体にどのくらい影響を受けたのだらう。「だけなのに」で止 ○句の続きはどんな述懐なのだらう。子供が転んだのなら大げさに泣きわめく子に「痛いの痛いの べてらんのする技である。

表現である。 ○前句を受けての一句。普通「ひりり」は唐辛子の辛味だとか皮膚の触感に使ふ。 実感なのである。 この句は痛みの

○原稿は「川縁」とある。もしやと思ひ勝手に替へた。よく似た字があるものだ。 ひに転ばれた痛みを庇いながらのお散歩。あとは時間が治してくれます。敏子さんは、 小春日和を川沿 このごろ連

### 田中藤穂

冬 今 日は寒 い暗い日です 寸 昏 か れ け 7 7 俄 整ふ ねと電話くる に 風 冬 の 度 音

字数が多いので「今日は寒い暗い日ですねと電話」と「くる」を取っても良いかなとおもふが、 穂さんは電話をかけたのか受けたのかはっきりさせたかったのだらう。 ○会話がそのまま俳句に仕上がることがある。 おもしろいものだ。この句もそれに近い。 ちょっと

も暮れたと思ったら寒い風が吹いてきた。 レビの前に据ゑた。 ○新居に揃へたものの中に炬燵があった。必需品である。十月に越すとコタツ布団無しの炬燵をテ 小春日和は67句、冬日和は44句であった。 べてみた。「俳誌のサロン」掲載句七万五千句の内春日和は5句、 ○日和は【晴天。なにかをするのにちょうどよい天気】に使ふ。俳句でどの様に使はれてゐるか調 一月もしたら炬燵布団をかけて本当の炬燵になった。掲句そのままである。藤 掲句は冬の寒い日の中で賜った過ごしやすい一日。 風の音が一段と寒さだけでない感情を描いてゐる。 夏日和は0 句 秋日和は45年 それ

穂さんの炬燵は布団はともかく一年中部屋に出してはゐないとおもふ。まさに冬支度、 炬燵本体を納屋から出してきて炬燵布団をかける。私のだらだら炬燵と違ひ季語に叶った炬燵なの 肌寒くなり

#### 長崎桂子

燈 久 核 兵器の の 合 ごさ説 の 間 く 兵 に の 逝く暮 道 報 鉢 恩 の 講 す 秋

この句の「兵」は普遍的な兵ではなく或る人を指してゐるのだらう。 ○俳句は内容と表現は車の両輪。字余りが気になったので「核兵器のむごさ説く兵逝きし秋」では。

やうだ。 曆十一月二十八日・新曆一月十六日)を中心にして行われる仏事】。桂子さんのお出かけになられ た日は寒かったやうだ。合唱の手をほどいて火鉢にかざす。寒さが増すほどに信心ごころも深まる ○○報恩講は【秋から新年にかけて、浄土真宗各派のお寺で行われる。 開祖・親鸞聖人のご命日

先月号桂子さんの「庭仕事片付く釣瓶落しかな」を「鶴瓶」としてしまひました。お詫び申します。

### 森なほ子

昼 子 月 越し は 夜 猫 の の み 月 つむ 睡 の の る た 小 め 春 ŧ か な の

と納得してしまふ。 ○碧空に薄白い昼の月を見付けるとしばらく眺める癖がある。 「11月の空のもの」と云ひきられる

もある?。 ゐる。 。 した。 嘩が弱いくせに外へ出たがる。喧嘩で負けてきて獣医さんのお世話に何回かなった。 アリにあやかって付けた名だが効果はなかった。外に出さなくなると見にくいドア越しに外を見て ついた作者もきっと立ち止られて猫と対面したことだらう。 ○家猫が窓際に坐って外を眺めてゐるのに出会ったことがある。猫に見つめられてゐることに気が ○眠りたいと思ってゐるのに眠れないのは辛いもの。 可愛さうなので日当りの良いウインドウに入れてあげたことをこの句からなつかしく思ひ出 なほ子さんは眠剤やお酒に頼らず健康な眠りを得るため黄落の中を歩かれる。 睡眠剤のお世話になる人もゐる。 わが家の猫はアリと名付けられた。 モハメッド・ 喧

26

#### 赤座典子

木 劇 助 の 日や冬芽くる 火照りに寒夜心 主 は 近所を IJ 見 、 と 輝 廻 地 IJ 良 きて 中 <

漏れ日の差し込んだ。ふっくらとした冬芽のそのときのやうすが浮かんできた。 ④ 急にようすが変化するさま。】と辞書を読んでゐて④の意を読んでこれだと思った。 ○「くるり」は分かってゐると思ったがこの句の中の「くるり」に筆が止まってしまった。【 ①軽 ○今観てきた劇への興奮度が伝はる。忘れてゐたこのやうな感情を思ひ起こさせた一句。「心地良く」 く一回転するさま。 ② 物を包んだり取り除いたりするさま。③ 丸く、愛らしいさま。 揺れ動く木 くりくり。

聞こえてきた。 ○主とはだれを指すのだらう。 侘助の咲いてゐるお宅を訪ねたら、 訪ねた先の主かと思ふが、 「主は近所を見廻り中」で留守なのといふ会話が私に 夫君とも読める。 「近所を見廻り中」も

が典子さんの興奮度を顕してゐる。

秋川泉

配 V げ 達 員 で 夜 の 凩 底 に に 負 る ま 厚 大 根 ぞ

う

ら

た

提

傾

<

糟

湯

酒

○「ひげでん」?。 いふところか。 鍋底の大根と聞くと売られるのを逃れてきた大根のやうだ。作者はそれを見付けてしめしめと で調べてみた。予想通りおでん屋さん。しかもおでんのチェーン店と知り驚い

らではの作品。 届けてゐるのを見ての作品。心の中で「頑張れ」と叫んでゐる事だらう。 ○作者が配達員でも句が成り立つが、 きっと凩の夜なかに街の中を走り回 労働の辛さを知る作者な ってゐるネッ  $\dot{O}$ 買物を

げでん」につづいてこの句も辞書のお世話に。 き撫でて…」と山上憶良の「貧窮問答の歌」にあるとおり、貧乏な人の飲むわびしい酒でした】と。 うなところでメニューにあったのだらうか。 万葉集に ○糟湯酒 【白酒をとった後の粕に湯を加えて作ったもので、香や味、アルコール度数の低い酒です。 「… 堅塩を取りつづしろひ糟湯酒うちすすろひて咳かひ鼻びしびしにしかとあらぬ髪か 知ってみれば飲んだことがある。これを居酒屋のや ひ

#### 七郎衛門吉保

凩 足 木 早な日暮れ を 枯 止 め 手 7 客 の لح 寒 寄 平 さ 返 せ LINE 地 す 温 下 度 の 計 7 街

といふことではないかと読んだ。 ○温度計を擬人化して詠まれたのか。ちょっと前まで温かかったのに凩が吹いたら途端に寒なった、 冬への急激な変化を理で詠まれた。

であるといふ。 ○その凩の寒さも地下街までは及ばない。地下街の特性を客寄せに利用したと詠んだ。 ○冬の日暮れも足早だが寒さも足早と二つに分けて詠んだ。「LINE して」で寒さの原因はLI 便利だが一面批判的な作者である。 Ñ E

#### 條田大佳

怨 海 冬 を 羽 見 田 に 7 脋 英語で 機影お え 7 夜 ほきくなる る の お に **〈**` ご れ か つ な 春 Z

伝える語彙としてでなく詩語として納得が行か行かぬかは作者自身が決める事だが。ここの「冬羽 田」は一考欲しい。 ○前にもこの欄で書いたとおもふが春・夏・秋・冬を名詞に直付けするのは注意を要する。意味を

より時代をさかのぼれば波止場が相応しいか。 列車なら猶更。 ○前句の羽田空港の光景であらう。昔日の別れの場といへば、上野駅の夜のプラットホーム。これ 今は飛行場だらう。 船を見送る機会は少なくなり、

雰囲気はない。 掲句は「海を見て」と海を見てゐたら着陸機が近づいてきた。この句からは見送り、 小春日和をただ楽しまれてゐる感がする。 お出迎えの

た。「怨讐」は重量のある語彙。余程のことがあったと推察した。 ○怨讐はエンシュウまたはオンシュウと読む。意味は同じらしい。 作者の個人的なおもひを句にし



### 维煮



## 雑煮の保守主義

### 篠田大佳

が家のオリジナルです。構造をそのままに家族の好みにアレンジした我であるそうです。伝統の味そのものではなく、我が家の雑煮は、父の好みと母の好みの混淆

•

• • •

•

. . . . . .

### 雑煮の糧

#### 秋川泉

母のお雑煮は大根と人参だけのお澄まし仕立でとてもシンプルなものだった。大根と人参を銀杏切に、ただ煮たものを中位の瓶に煮汁と入れ『雑煮のを御節料理と共に振る舞った。昭和のあの時代は、家族揃って元旦は祖父やなから新しき年の家族に対しての言葉が述べられ、年少者から次々と御屠蘇が述べられ、年少者から次々と御屠蘇が述べられ、年少者からからおしき年の家族に対しての言葉が述べられ、年の者から次々と御屠蘇が述べられ、年の者から次々と御屠蘇が述べられ、年の者から次々と御屠蘇が述べられ、年のお雑煮とお節料理を持た。

### 下石神井日録

藤 喜 老

が。 スチロー 立浪草、 んで連れてきた。 しまったものに今心残り。 引越の時、 それでも数鉢引越荷の段ボー 水引草、 ルの箱に植えたものもあったので諦めたのだ 植木鉢を択んで持ってきた。 浜木綿などが浮かぶ。 曼殊沙華の赤と白、自然薯、 ル箱の隙間に詰め込 これらは発泡 置いてきて

また蜜をだらだらたらしながら咲いてくれるだらうか。 () と純白の花びらにところどころ赤がしぶいてゐる。 いた。それがいつごろからか本当に純白になってしまっ が白だけにしたかったので苦労してここまで育てたと聞 わざ家まで運んできてくれた。 い椿は『東絞』といふ名の椿。 連れてきた鉢にはどれも人とつながってゐる。 今は引越してきてご苦労さんと地植えにした。 六十年前頂いた時と大きさがほとんど変ってゐな いのは黒い幹の竹笹。 絞りといふのでよく見る 古流のお花の先生がわざ これは屋号にちなん 一番古 春に 先生

> あげなければと思ってゐるところ。今は俳号に因んで てゐるので毎年筍が生えるのだがいつの間にやら消え で藤穂さんから頂いたもの。 しまった。 しまふ。暖かくなったら地植えにする。 これも鉢植えで痛めつけ 何とかして

振りか。 老ごころ」と春の句になって『あを』に発表でき 張ってゐるのを見付けた。わが物の天然氷は何年 みとなった。このポリ容器に十二月のある日氷が 持ち上がらないくらいに大きいポリ容器である。 器を雨の日に庭に置いた。満杯になったらちょっと とおもふがわがままかなと思ひ言ひ出し なければならない。 んとその時の雨で満杯になった。 庭に置いた鉢に水をやるためには部屋の中を通ら そこで一計が浮かんだ。 毎日小さな自然と接してうきうき暮してゐる。 うれしくなって「うすら氷にこども心と 大家さんに相談してみやうか 要らなくなったポリ容 鉢の水遣りは雨頼 かねてゐ

#### あをキ ワ ド俳句辞典 ほけ ほ

介護保険みなお し見送り冬至の湯

芝宮須磨子

余寒なほ縁者の惚けゆくを目に

長崎

須賀

ポケッ

巴里祭秘密の鍵をポケ 凍てる朝両手ポ グットにひそまれの一言神籤ポケ ひそます - 急ぐ足 ケの に ットに

るぶる夏野原 井田上中 藤穂

計ポケットに入れ秋日和や悴みし掌をポケットに入れば家郷かな

の柿 'n **▼** トのどこかに切符通し鴨 が実一つポケットに が実一つポケットに トに秋思しまうて雑踏へ トのなくて手が暇日向ぼこ トに石詰め終り秋の海

**保護 保護 鉾** なり浴衣の子

鎌倉喜久恵

後佐早 藤藤崎

でこぼこが凸凹に地球さくらの芽凸凹の地球枯葉のからみつく皿屋敷幕間の幕凸凹す 春の星この保護犬を幸せに節分草保護区の外れ坐禅草保護区の外れ坐禅草の形などがあり

にの 立墓

5

母校

平等院雲中菩薩大緑蔭 **菩薩** 暦川巡りて母校の門にの雨母校見下ろす夫の

> 森森 森森 発木多枝子 ては子 なほ子 佐佐佐竹藤藤藤内 恭恭子子 喜弘孝子

東 亜 未

長崎 桂子

33

石に浮く菩薩の顔や春時雨大菩薩峠へ熊避けスプレー持ち大菩薩峠へ熊避けスプレー持ちりの日や母とは観世音菩薩をまでふぶき石より出づる菩薩さまでふぶき石より出づる菩薩さまでふぶき石より出づる菩薩さまであぶき石より出づる菩薩さまであがき石より出でも菩薩や春うららの世段は輝く菩薩の顔や春時雨 ありつたけの星を降らせし大日 選難小屋満天の星 i モード 温暖化してゆく星や去年今年 裸木の矛先星のとどまれり 東星に追憶の日々甦る 草の実や星蒼茫と水の音 流星や午前二時からカフェオー 流星や午前二時からカフェオー で、重去る枯木に星を貼りつけ を、直去る枯木に星を貼りつけ を、高る星は宇宙のしずく心太 のある星は宇宙のしずく心太 ド大旦 け Ť

> 大須佐長木佐佐田須渡日賀藤崎村藤藤中賀邉 章 敏 喜 桂 登 恭 恭 藤 敏 友 江 子 孝 子 子 子 港 子 七

関佐栢須栢須渡芝後斉須佐 口藤森賀森賀辺 藤藤賀藤

ゆ喜定敏定敏友尚志嘉敏恭き孝男子男子七子づ久子子

安房岬灯して呼べり夜這星 水甕に星を残して明易き 水の底に返す夜更けの星の冷 べネチアの異邦人なり星流し が1ゴダ涼し暁の星右肩に が1カロととればひそともに仰げば星流る やまなしをともに仰げば星流る を展面しばらく照らひ星右肩に をこさればひそと星落を を関すればひそと星落ちる であるの幹の星層浅緑 であるのがれたる煙草のむ なまなしをともに仰げば星流る を関しばらく照らひ星流る であるの中げばうるむ夫のこと 東星の一つ動くは尾灯らし をともに仰げば星流る を関ロの幹の星層浅緑 であるのよりけりさくら草 を房岬灯して呼べり夜這星 を見てみなりまるとし

渡森斉田長赤渡鎌定佐渡竹佐渡赤佐渡渡須渡森関関邉藤中崎座邉倉梶藤邉内藤邉座藤邉邉賀邉□□ 友理裕藤桂典友兄よ恭友弘喜友典喜友友敏友理ゆゆ 七和子穂子子七恵う子七子孝七子孝七七子七和きき

枯名鵲遠流 野月のにれ の泳

たり 

末前の発生の とみなまで聴かぬ流れ星学どのあたり宇宙船学どのあたり宇宙船ででであるにではまる二人ですがれてあはき星の中すがれてあはき星の中での一つや談志逝く中の一つや談志逝くける星形に障子繕へりける星形に障子繕へりける星形に障子繕へりがないがらよ早星のかるたにも青葉剤のかるたにも青葉剤 のけ さえざえ とまる り لح

吉井竹森須田篠續遠遠定田木森木木鈴遠吉渡渡長佐成上内 賀中田木藤藤梶中村 村村木 成邉邉崎藤 じ 茂茂多 美代石弘理敏藤純文 よ藤登理登登枝藤代友友桂恭子動子和子穂子子実実う穂子和子子子実子七七子子

#### あとがき

今年もよろしくお願ひ致します。

第。 た。そこから自作に責任を持たなければと自覚した次 なってくれる。例を私にとると暖流では瀧春一先生、 獐では高島茂さんがでんと構えて居た。気がつくと二 しらずに自作の評価の物指になって頂いてゐたと知っ Aはゐず野中に一人立ってゐる心地になった。 知らず 俳句結社には先生がゐて出来上がった作品の物指に 自作品を自身で採点する力を付けやう。 『あを』は会員誌、自信を鍛へる第三の目を育

### あをの投句について

郵便配達は移転に拘らず混乱はなくホッとしてゐ

角と結構編集時に悩みます。そこでメールに加えてし うです。またアルファベットの大文字小文字、 あります。(別途方法はありますが)蟬・楤などがさ メール投稿についてですが、メールで使へぬ漢字が NEで投句箋の画像を送ってください。 全角半

てLINE画像だけでも結構です。ご協力よろしく。

### 随筆のお題「力士」

兄さんがテレビを組み立てたといふ。早速仲良しにな もおいそれとは見られない。同級生の家が電気屋でお 情報を得るのは新聞とラヂヲ。小学校でも遊びのひと 出身といふ単純な理由。その頃はまだ四本柱があった。 が目に残ってゐる。(喜孝) り押しかけて観戦した。むき出しの青白いブラウン管 の戦法をまねた。その後テレビで大相撲が放送されて つに相撲があった。私は非力だったのでもっぱら岩風 私が最初に応援したのが照國。父母の故郷の秋田県

発行日 一 発行日 一 IF 177-0042 一月二十日

カット/須印刷・製本 

 090
 9828
 4244

 サンハイツ石神井2
 一階

 東京都練馬区下石神井一丁目六の三

ゆうちょ銀行